



# おすすすめの一冊

## 芥川龍之介「鼻」

**高**

校時代に家にあった芥川龍之介全集の中に「鼻」という短編がありました。

「禅智内供の鼻と云えば、池の尾で……」で始まる短編は、お寺のお坊さん「内供」が主人公であり、時代背景ははっきりしませんが、江戸あるいはそれ以前と思われます。彼は非常に長い鼻（五六寸＝15cm以上）を持っていたので、地域では有名でした。

しかし、本人もそのために内心では気にかけていたのですが、それを表に出すことはしません。僧侶であるがゆえに自分の自尊心が許さなかったからです。ご飯を食べるにも弟子が板で鼻を支えているほどですから、一人では食べられません。

ある日のこと、彼のお弟子さんが鼻を短くする施術を行っている医師がいるという噂を聞きつけ、その方法を学んできたというのです。

しかし、自尊心の強い主人公内供は気にも止めない素振りをして、弟子が強



『羅生門・鼻』  
芥川龍之介  
新潮文庫刊

く勧めるのを待っていました。お弟子さんたちもそれを知っているのですが、その方法を試してみるべきと何人も僧侶が強く勧めたのです。

彼はしぶしぶの態度で、鼻を熱い湯に浸して、その後足で踏むという方法を受け入れました。すると何と鼻はみるみる短くなったではありませんか。表には出しませんでしたでしたが、内心で

は、これで自分の鼻を笑う者はいないと内供が喜んだのは言うまでもありません。

しかし、彼が颯爽と外に出かけると人々は面と向かっては何も言いませんが、陰でクスクス笑っているではありませんか。彼は落ち込んでしまいました。それからしばらくしたある寒い晩に、鼻がむず痒く熱っぽいので、病気になる

ったのかと思いつき、翌朝目を覚ますと、短かった鼻が元に戻ってしまっていたのです。彼はほっと胸をなで下ろしました、というあらすじです。

この短編は人間の心の奥にある感情と、人の不幸に同情する心と同時に、人の不幸を喜ぶ感情があるなど、複雑な内面を巧みに描いています。夏目漱石が絶賛し、作家芥川龍之介がデビューするきっかけとなった作品です。

そして、私が何回も読み直して気が付いたのは、彼の他の作品もすべてそうですが、文の最後が必ず同じではなく、例えば「である。」で終わる文の次は「であった。」になっていたのです。それが彼の小説にどのような影響を及ぼしたのかは定かではありませんが、当時の作家の文章に対する繊細な配慮を垣間見た気がして驚きました。読んでみてください。

余談ですが、この文もそのようにしてみましたが、いかがでしょうか。

## 櫻林郁之介

さくらばやしいくのすけ  
予防医学事業中央会 理事長

山梨県生まれ。自治医科大学名誉教授。1968年日本大学医学部卒業、1974年自治医科大学臨床病理学教室。2008年自治医科大学さいたま医療センター教授を退職後、さいたま看護専門学校校長を経て、2016年より現職。